知りたい！ 治療の最前線 ◇30

大学病院の薬剤部

全病棟に専任を配置

重症疾患、希少疾病、がんなどに対して、国内外で新薬や新しい治療法の開発研究が行われています。特定機能病院である富山大附属病院でも、患者さんのニーズに応えるべくこれらの新しい治療を取り入れていますが、そこでは薬剤部に所属する薬剤師のサポートが欠かせません。

一口メモ

患者が入院時に持参する薬の中に大量に飲み残した薬を確認することがある。古くなった薬は効果が減弱しているだけでなく、未知の副作用が起きる恐れもある。日頃から医師やかかりつけ薬局に相談して残薬を調整し、不要な薬を減らしたい。

小野 敦央
富山大附属病院
薬剤部副薬剤部長

治験薬の調剤・調整も

当院では全ての病棟に専任薬剤師を配置し薬剤業務を行っています。

この病棟専任薬剤師は、患者さんが入院前に服用していた薬を確認し、当院で扱っていない薬があれば代替薬を提案します。手術前は中止すべき薬を使っていないかなど服用状況を、入院中は処方薬の内容を確認します。特に副作用が多いハイリスク薬については、投与量や点滴速度などに間違いがないか医師の処方内容を確認し、投与が始まる前に患者さんへ説明します。

投与後は効果や副作用の発現状況を確認し、状況に応じて処方変更などを医師に提案します。医師や看護師からの薬に関する問い合わせへの対応や情報提供も積極的に行っています。

ハイリスク薬

ハイリスク薬の一つに抗がん剤があります。抗がん剤治療を行う場合、入院・外来を問わず、投与方法や投与期間、手順などを記した計画書（レジメン）を作成し、院内の審査委員会で承認した薬とレジメンを用います。がん薬物療法認定薬剤師を中心にこのレジメンの作成を補助し、医師の負担を軽減します。抗がん剤処方時は薬剤師がレジメンに照らして、投与量などに間違いがないかチェックし、さらにいくつかの確認作業を経た後、無菌室で調製を行います。

大学病院は新薬開発のために治験を行っています。製薬メーカーから依頼を受けて、院内の治験審査委員会の承認後に行われますが、治験担当薬剤師（臨床研究管理センター）は治験審査委員会前にヒアリングを行い、問題点などを事前に精査し製薬企業に確認します。治験実施中は全ての治験薬を厳密に管理し、調剤と調製を行っています。

適応外使用

一方、従来の治療法では効果が期待できない患者さんには、医薬品の適応外使用を行う場合があります。

これは、海外で承認されながら国内で未承認の医薬品について、海外での使用例や文献を基に、国が認めた適応症または用法用量を変更して使用することです。

当院では適応外使用の際は、臨床倫理委員会で投与計画などを記載した申請書とともに、根拠となる資料、患者さんへの説明書及び同意書などの内容を審議します。承認した適応外使用の内容は薬剤部などで情報共有し、処方内容確認の際は承認済みであることを確かめます。使用中は医師とともに薬剤師も有効性や副作用について注意深くモニタリングします。

また、認定薬剤師らは「栄養サポートチーム」「糖尿病教室」に参加し、「薬剤師ゼネラルリスクマネージャー」は医療安全管理部門、「抗菌薬適正使用支援チーム専従薬剤師」は感染制御部門にそれぞれ配置されています。妊婦向けの薬剤師外来もあり、薬剤師の業務は調剤業務以外にも多岐にわたります。

◇

次回は3月3日に掲載します。

㊤患者に薬の説明をする薬剤師＝富山大附属病院
㊦抗がん剤の調製をする薬剤師